

## 日本医学会分科会活動報告

一般社団法人日本農村医学会  
理事長 佐藤賢治

I. 医学および医療の水準の向上への貢献が日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会の独自の活動を以下に留意して記載をしてください。

a. 特に学術的に重要と考えられるもの

当学会は農村地域のみならず、地域医療を支える医療・保健・福祉を総合的に研究・実践する学術団体として活動している。全国の厚生連病院の医師・医療スタッフを中心に、大学・研究所等の研究員から構成され、5,000名弱の学会員を擁している。

学会独自の特別研究プロジェクトとして、①農薬中毒部会、②農機具災害部会、③農村の生活習慣病部会が活動している。

### ① 農薬中毒部会

2004年に発足、農薬に関連する調査研究を広く行ってきた。活動の実際は以下の通り。

- 農薬中毒臨床例調査
- 農家の農薬暴露とその影響に関する研究
- パラコート中毒の臨床・疫学的研究
- 石灰硫黄合剤による化学熱傷の防止に関する啓発
- 農薬中毒に関する文献レビュー
- 農薬被害防止に関する啓発

### ② 農機具災害部会

2004年に発足、2010年にはJAの全国機関と「全国農作業事故防止連絡協議会」を設立して活動を進めた。主な活動は以下の通り。

- 農作業危険箇所改善コンクール
- 農作業安全対策事業（農林水産省補助事業として受託）：報告書「こうして起こった農作業事故（I～IV）」および「農作業安全の手順1,2,3～農作業事故を未然に防ぐ～」、トラクターなどの機械・作業別に安全対策に関するパンフレットとDVDの作成
- 外国人労働者に対する安全衛生教育教材作成事業（農業）（2019年度厚生労働省委託事業）：11か国語のパンフレットとDVDを作成
- 日韓合同農作業安全シンポジウム等の開催
- 農作業安全教本の作成：農薬中毒部会との共同事業

### ③ 農村の生活習慣病部会

2004年に高齢化が進む農村において生活習慣病の実態を調査し、予防を図る目的で発足、2016年まで健診および人間ドック受診者を対象に一次コホート研究を行った。2016年からは農業従事日数やソーシャルキャピタルと健康寿命の関連を明らかにする目的で二次コホート研究が開始され、実行中である。

b. 当該領域における国際的な役割

当学会は、1961年にフランスで創設された国際農村医学会(International Association of Rural Health and Medicine: IARM)の中心的役割を担ってきた。IARM 学術総会は数年ごとに開催され、日本では1969年長野(学会長:若月、佐久総合病院)、2018年東京(学会長:新谷、JAとりで総合医療センター)で開催した。IARM 事務局は当学会が担当しており、学会誌 Journal of Rural Medicine (JRM)は当学会の英文誌と共通機関誌として当学会が編集・発刊(Web)している。

c. 活動からもたらされる社会的な意義

当学会は、農薬被害や農作業事故、農村の生活習慣病など農村に直結した調査・研究を行っており、この分野においては極めて有用な成果と具体的な対策を提供している。また、学会員は全国の厚生連病院の医師・医療スタッフを中心に、研究分野からの参加もあるため、当学会には職種を超えて、広く地域医療に直結した知見が集まる。少子高齢化が急速に進む中、「高齢化・生産人口減少社会の中での地域医療」の確立は喫緊の課題であり、当学会が果たす役割は一層重要である。

d. 学会運営上留意している点

当学会の学会員のうち9割が全国の厚生連病院に勤務する医師であり、当学会の活動の基盤は全国の厚生連病院にある。公的病院である厚生連病院の運営・経営が安定していなければ学会の活動力が低下する。今後も全国の厚生連病院との連携を密にしていきたい。

II. 日本医学会分科会にふさわしいと考えられる貴学会と他の分科会との連携による活動を記載してください。

当学会は、その活動内容から公衆衛生学、労働衛生学、環境衛生学との関連が深いですが、現在のところ該当する学会・分科会との直接的な連携はない。学会員が所属する組織、学会、研究団体、行政機関等との学会員個人を介した間接的連携は現実的に存在し、農林水産省・厚生労働省などの省庁との連携実績がある。